

館蔵品から③

浅井忠(1856-1907)
《大仏殿(平城)》
1888(明治21)年
水彩・紙
26.5×38.0cm

夏目漱石の『それから』にこういう場面がある。

中に置いた湯呑みには浅井黙語の模様畫が染め付けてあつた。

「黙語」というのは洋画家浅井忠の雅号。浅井のデザインした湯呑み*を、漱石はなにくわぬ顔で物語にすべりこませている。気がつく人だけにこっそりと打ち明けておけばいい。そんなさりげなさを装った浅井忠へのはなむけとみてもいいだろう。なぜなら浅井忠は、『それから』が生れる一年半まえにすでに京都で亡くなっていて、その報に接するやいなや、浅井の才能を惜しんだ漱

石は、深い嘆きを洩らしているからである。たとえば、『それから』に先立つ『三四郎』において、漱石は「深見さん」と呼ぶ画家のこととして、「深見さんの水彩は普通の水彩の積^{つもり}で見ちや不可ませんよ。何處迄も深見さんの水彩なんだから。實物を見る氣にならないで、深見さんの氣韻を見る氣になつてみると、中々面白い所が出て來ます。」と、登場人物にいわせているが、これはまちがいになく漱石の浅井評そのものだった。漱石に限らず、浅井は油彩より水彩と当時の眼利きたちの意見は一致していたのだろう。ようするに厳しいリアリズムにむかうには、浅井の感性はあまりにかるやかに呼吸して、とぼけた「俳味」にみちていたのである。

*1907年(明治40)は浅井逝去の年になったが、その9月、彼は自らの図案による陶磁器を売る「九雲堂」を開店、それを漱石とも親交のあった磯田多佳に任せていた。だから漱石が浅井のデザインによる湯呑みを実際に持っていた可能性は高い。(Hs)

